

# 黒船来航 れぼりうしおん にっぽん音楽革命

2015年度国立音楽大学音楽研究専修  
(音楽学研究コース、音楽情報・社会コース)  
専門ゼミⅠ・Ⅱ 研究発表会

## 【序章】

今からおよそ150年前、浦賀沖にペリー艦隊が現れ日本の歴史は大きな転換期を迎えました。いわゆる文明開化です。明治時代に入り近代化を図った日本は、欧米と肩を並べる国家を目指し「国策」として西洋音楽を取り入れました。それは軍楽、儀式、外交、教育の場と多岐に渡り、やがて大衆の中に広がり、様々な形で開花していくのです。また、日本にはもともと雅楽や能、狂言などの伝統音楽があり、西洋音楽の流入は、日本人が自分たちの音楽を見つめ直すきっかけともなりました。

今回の研究は、明治以降、日本人がどのように西洋音楽を受容してきたのか、そこにはどのような創意工夫と経緯があったのか、和と洋の出会いからどんな音楽が生まれたのかをたどります。そしてそれらが培養土のようにはぐくんできた、まさに現在の「私たちの音楽」を再認識しようという試みです。皆さんも是非一緒に、この《黒船来航にっぽん音楽革命》をたどってみませんか？

## 【ペリー来航と横浜居留地】

1853年、ペリーは大統領領

親書を手渡すため、華々しい軍楽の響きとともに久里浜に上陸しました。それは当時の日本人が聴いたことのない西洋音楽で、大砲の音とともに人々の度肝を抜きました。翌年ペリーは横浜に上陸し、今度はポーハタン号に幕僚を招き、顔を墨で黒く塗ったミンストレルショーで彼らをもてなしました。「エチオピアン・コンサート」と名付けられたそのショーはフォスター作曲のアメリカ民謡などが歌われた陽気なショーで、緊迫感のあつた日米両陣営も大いに楽しんでたということです。

ペリーが持ち込んだのは、音楽とともに、その音楽を上手く利用した西洋文化でした。人々の統率、通信手段、戦意高揚として有効とされた西洋の軍楽は、幕末の幕府・各藩での太鼓、吹奏楽修練を経て明治の軍楽隊設立へとつながりました。またその流れは、一方では幕末鼓笛隊を生んだのです。

ペリー上陸後、横浜は外国の窓口として開港し、多くの外国人と外国の駐屯軍が居留しました。彼らは外国での生活をそのまま横浜に持ち込んだのです。外国人の邸宅では音楽会が開かれ、日曜日には音楽隊を先頭に街を練り歩く姿があり、「ドンタク」と呼ばれまし

た。また、山手公園には野外音楽堂が設立され、イギリス駐屯軍の軍楽隊演奏などが行われました。

## 【日本での鍵盤楽器づくり】

現在、楽器製作は日本の一大産業です。ではその原点はどこにあるのでしょうか。横浜などの外国人居留地にはたくさんの方の西洋の楽器が持ち込まれました。環境の違い日本では楽器の調律や修理がつきものです。そこで外国から調律師や楽器商人たちもやってきて、次第に日本で楽器の製造、販売が行われるようになりました。例えば横浜の中華街では、来日した華僑などによりピアノが作られました。また外国人から楽器づくりの技術を学んだ西川虎吉や松本新吉などが活躍した一方、山葉寅楠のように独自に鍵盤楽器づくりに取り組んだ日本人も多くいました。

リードオルガンはキリスト教会での讚美歌の伴奏に多く持ち込まれていて、またピアノよりも安価だったため、唱歌教育が義務づけられてからは少しずつ学校にも取り入れられていきました。娯楽のためのものも含め、鍵盤楽器にはこのような需要があり早くから各地で作られていったのです。



## 【儀式】

明治に入り、日本の伝統的なお祭りや儀式が次第に変容していきました。今回は香取神宮の式年神幸祭と、天長節について取り上げます。

約800年の歴史を誇る香取神宮の式年神幸祭は、応仁の乱の後一度廃れてしまったものの、明治維新と共に復興の聲が高まり、やがて12年に一度開催される特別なお祭りとなりました。元は20年に一度、新たな社殿を造設する際に行われたシンプルな祭事でしたが、現代では、西洋音楽伝習の先駆けとなった軍楽隊から発展した鼓笛隊の演奏も行われるようになっていきます。また、西洋の国王誕生日の祝典を模倣した政府の働きかけにより、明治になると天長節が国民的な祝祭となります。ここでは、

西洋音楽が流れる中で、西洋料理も振る舞われました。そして何よりも注目すべき所は、この儀式で西洋音楽を演奏していたのは伶人（雅楽家）であったということです。伶人たちによる日本音楽と西洋音楽の兼修。日本と西洋の融合がなされた瞬間でした。

## 【教育】

私たち日本人は教育を通して音楽を学んできました。現在、私たちの周りで音楽が盛んであることは、今まで行われてきた音楽教育が音楽を学ぶ上で大きな役割を果たしてきたことの証拠とも言えます。

今回、音楽教育では大きな二つの流れを追っていきます。一つは軍楽、居留地をきっかけにして流入した音楽が、一部の民衆に受け入れられ始めると同時に、明治政府が音楽（唱歌）を正式に義務教育に取り入れるために、音楽について調査研究を行う機関として音楽取調掛がつくられ、現在へと続いている流れです。二つ目は女子教育の一環としての音楽の流れについて見ていきます。疑問に思う人もいるかもしれませんが、諸外国の修道会が女子教育を推進したお

かげで、現在の女性の社会進出があると言っても過言ではないでしょう。そんな当時の女子教育の大きな柱の一つであった音楽教育を見ていきます。

## 【官の施策が生んだ音楽】

ここまでペリー来航から「国策」として取り入れられた西洋音楽がどのような形で日本人に広まっていたのかを、様々な面からたどっていきましたが、西洋音楽はどのように日本人に浸透していったのでしょうか。今回の研究では二つの視点に軸足を置き、浸透の仕方を見つめます。一つ目の視点は民衆の音楽です。民衆の音楽では、ペリー来航以前から存在した民衆の音楽が官の施策によってどのように変化したのかを、「どどいっ」「演歌」を例に見た後に、西洋音楽受容によって新たに生まれた民衆の音楽を見ていきます。

二つ目の視点は新日本音楽運動です。大正期から昭和初期にかけて、邦楽界全体が西洋化を志向していました。邦楽に洋楽の要素を取り組もうとする試みは明治期から行われていましたが、本格的な融合という点ではこの時期からと言えます。そして、宮城道雄を中

心に展開される新日本音楽運動が始まったのです。

宮城道雄の代表作に《春の海》があります。この作品は「日本の古き良き伝統音楽を受け継ぐ」と認識されていますが、実際には西洋音楽の要素が至るところに組み込まれています。普段、私たちが「伝統的」と思っているいくつかの作品には、西洋音楽の影響が強く残っているのです。同時に、この時期には三味線、琴、尺八の楽器改良が行われていました。当時は和声楽器に進んだ音楽という風潮があったため、邦楽器を西洋化する試みがなされていたのです。特に、尺八とフルートの融合楽器、オークラウロには魅力的な要素が多く含まれています。新日本音楽運動の章では、西洋の影響を受けた作品と楽器改良について考察していきます。

## 【実演について】

研究発表会当日は、前述した《春の海》（琴とヴァイオリン）とオークラウロの実演があります。《春の海》は本学学生による演奏、オークラウロは外部からの演奏者をお招きしています。ぜひ、この機会に和洋折衷の響きに触れてみませんか？